

「牧師室」(2016年2月7日)

『1943年のクリスマスイブにD.ボンヘッファーが刑務所の独房で書き記した手紙の文章から』「先ず言いたいことは、わたしたちの愛する人の不在に替わる人物は誰もいない、ということです。そして、わたしたちは、不在の人に替わる誰かを見つける努力をしてはならないのです。そのことをわれわれは単純に耐え忍ばねばなりません。それは、初めとても厳しいように聞こえますが、しかし同時に大きな慰めでもあります。何故ならその空席が満たされないままで残されていることによって、わたしたちは、不在の人とお互いに結び合っているのです。もしわたしたちが、神がその空席を埋められる、と言ったとすれば、それは間違っています。そうではなく、神はむしろ空席をそのままにし、そのことによって私たち相互の古い交わりを、確かに痛みは伴いますが、保たれるのです。

更に言いたいことは、過去の思い出がより素晴らしく、感謝に満ちていればいるほど、別れはより辛い、と言うことです。しかし感謝の気持ちが、思い出の辛さを、静かな喜びに変えてくれるのです。

わたしたちは、過去の素晴らしいことを棘のように、持ち運んでいるのではなく、高価な贈物のように大事にするのです。わたしたちは、過去の思い出に沈潜したり、それにひたったりしてはなりません。高価な贈物・宝を、頻繁に眺めていたりしないように、過去の思い出が、継続的な喜びと力になるためには、それを持っていることに確信が持てることです」。

(この文章を昨日、わたしにコピーして送ってくれたのは、昨年93歳の連れ合いを天に送り、その後、ホームでの生活を始めた夫人です)。